ニッポン臨終図巻

ドクター和の

⑬31　歌手　大橋純子

最後まで歌諦めず旅立つ

僕の母校は東京医科大学。学生時代の多くを、新宿の街で過ごしました。キャンパスから徒歩圏内にある新宿2丁目にも時々遊びに行きました。先日、久しぶりにこの街の大好きな歌謡スナックに寄ったところ、開店41周年ということで当時の話題で盛り上がりました。つまりこの店のオープンは1982年、僕は当時24歳で大学5年生。だからことさら、懐かしく覚えています。

店のマスターと一緒に1982年のヒット曲を語り、歌いました。この年の邦楽1位は、あみんの『待つわ』。2位は薬師丸ひろ子の『セーラー服と機関銃』、3位は岩崎宏美の『聖母たちのララバイ』、4位が中村雅俊の『心の色』。なんと名曲揃いの年でしょう！　僕の大好きな一曲『シルエット・ロマンス』（リリースは前年）は18位。えー？もっと上位かと思っていた！　しかし男からも女からも長く愛されている歌のランキングとしては不動の1位かもね…そんな話をした翌日に、まさかの訃報でした。

この『シルエット・ロマンス』や『たそがれマイ・ラブ』で知られる歌手の大橋純子さんが11月9日、東京都内の病院で亡くなりました。享年73。死因は「食道がんの再発のため」と発表されました。

大橋さんに食道がんが見つかったのは2018年、67歳のとき。定期健診時の胃カメラで発見されたとのことで、初期のがんだったようです。さらにこの食道がんの入院直前の検査で、乳腺のがんも見つかりました。

がんと診断された人に同時期、あるいは少したってから別の原発性のがんが見つかることを「重複がん」または「多重がん」と呼びます。

大阪国際がんセンターの調査によれば、60代の人では、最初のがんが診断されてから10年以内に13％の人に別のがんが見つかるとのこと。だからそれほど珍しいわけではありませんが、一つのがんでもショックを受けるのに、重複がんと診断され、精神的に参ってしまう人も多くいます。

さらに現代のがん医療は、臓器別縦割り制。大学病院などではAのがんとBのがん、まったく違う主治医が付くことも患者さんにとってはかなりの負担となります。

大橋さんは食道がんに関しては今後の歌手活動を考え外科手術でなく化学療法を、乳腺がんに関しては左乳房の全摘手術を受けたそうです。その翌年、歌手として見事に復帰。「まだ歌を捨てきれない自分がいる。歌いたいという気持ちがあるうちは、細く長くでいい、何とか頑張っていこう」と当時のインタビューで語っています。それから4年あまり。最後まで歌を諦めることなく旅立った大橋さん。人生のたそがれを、精いっぱいいとおしみ、慈しんだことでしょう。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウイルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。